『家相方位指南』にみる江戸の家相説——第二報

村田あが

緒言

前報[*1]に続き、天保六年（一八三五）自序の家相書『家相方位指南』の翻刻、分析を通して江戸時代中・後期の住まい造りへの家相説の影響を明らかにする。本稿では前報に記した本書の構成[*2]をもとに上巻を翻刻し[*3]、内容の分析を通して著者の家相説について考察し、江戸時代中・後期の家相説解明の一助としたい。

著者の宍戸頼母は易学、家相で名をなし、明治十五年（一八八二）頃没したとされる。本書の他にも数冊の家相書を刊行している[*4]。

一、『家相方位指南』上巻の翻刻

底本としたものは大正四年（一九一五）に東京市京橋区畳町の須原屋書店から再版された三冊綴じの版本である。本文と図、表が混在し、図中の説明文も多いことが本書の体裁上の特徴とも言えるが、翻刻にあたり、図表には番号を付し説明文との対応を明らかにし[*5]、読みやすさを優先して改行や表記は底本の通りとはせず、句読点を加え、旧字体も一部新字体に改めた[*6]。

（一頁）

（図一）九宮二十四方位図　五行相生　木生火　火生土　土生金　金生水　水生木、五行相剋　木剋土　土剋水　水剋火　火剋土　金剋木、五行方位　木は東春　火は南夏　金は西秋　水は北冬　土は中央土用　但し四季に在る丑辰未戌の月。

図1　九宮二十四方位図

（全ての図と表1は東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の版本より転載）

（これに続く自序は前報に翻刻済み*7）

（二頁）

（図二）八卦は八方の体卦とし、その備えにより外卦に変爻をつけて用卦とす。出張たるは上爻変、入り込みたるは初め爻変、平全の門戸には中爻変とす。たとえば東方張りたるは☳の象とし、入り込みたるは☶の象とし、平全の門戸には☲の象とする類なり。外はこれにならえ。東平全の門凶とするは、☲子を☱金より剋さるを以てなり。

天は陽にして動く故に上卦を用とす。下卦は地にして静なり。上古は穴に居り野に処、聖人など水に易て宮室を作り、風雨寒暑を凌ぎ壮健ならしむる事を教えたまえり。大壮の卦象を取りたまえり。下の四陽爻を柱とし、上の二陰爻を棟宇に組み上げたり。

（図三）亜の字は城郭の象形なり。黄帝始めて城邑を作るの原なり。①右の図は亜の字の全形陽の矩なり。②上の図は亜の字四合の中陰の矩なり。③此は中は陰の矩、上下は陽の矩を分離したるものなり。城は木なり。築は城作るの意なり。

（三頁）

（図四）①東張り吉相の図　東方出張りたる宅地は家業繁栄し、又芸道に発達し、名を遠近にあらわし、目上の引き立てを受け、立身出世の相なり。②東張りに類する吉相の図　四角なる地面の内を一隅他へ貸す時は、欠けとなる、凶なり。二隅を貸す時は吉なり。本宅。他人の貸し地として境を立つ。是又他人の住居。③東張りに似て巽艮の両欠けとなる凶相　此の図は東張りに似て却って巽艮の両

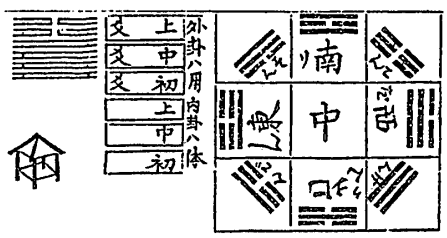

図2　八卦図

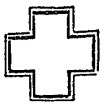

図3　城郭図①

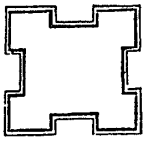

図3　城郭図②

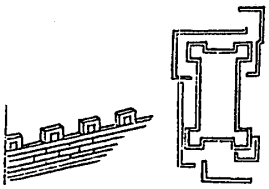

図3　城郭図③

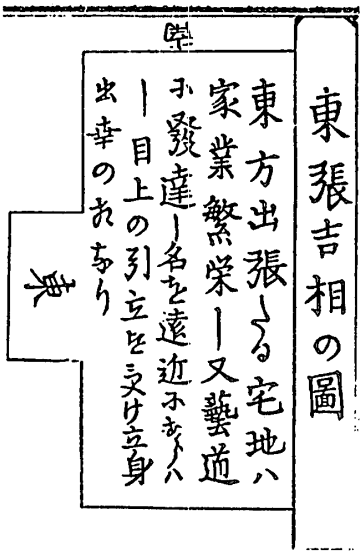

図4　①東張吉相の図

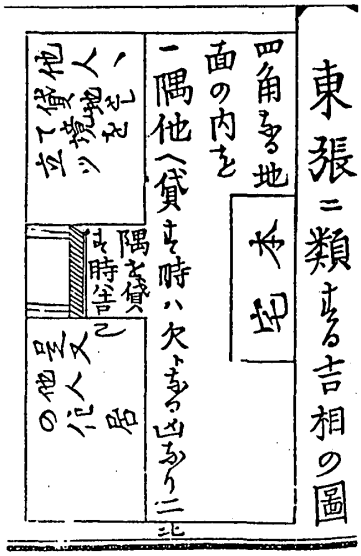

図4　②東張に類する吉相の図

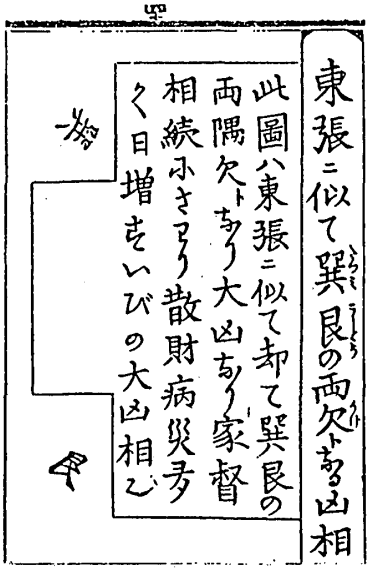

図4　③東張に似て巽艮の両欠けとなる凶相

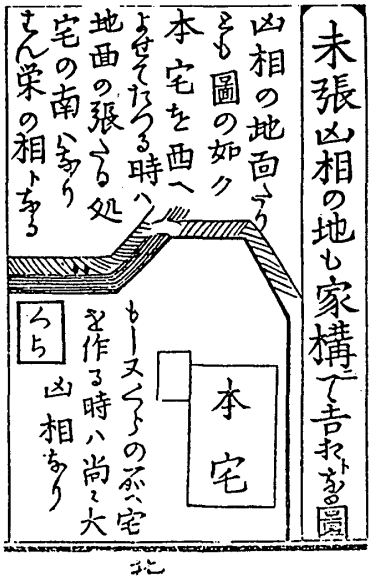

図4　④未張凶相の地も家構にて吉相となる図

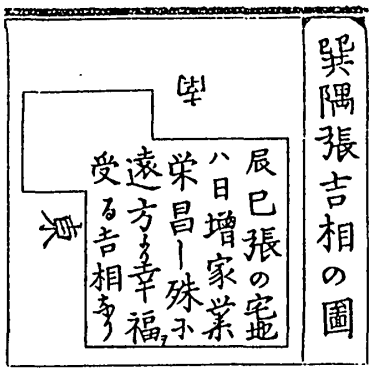

図4　⑤巽隅張吉相の図

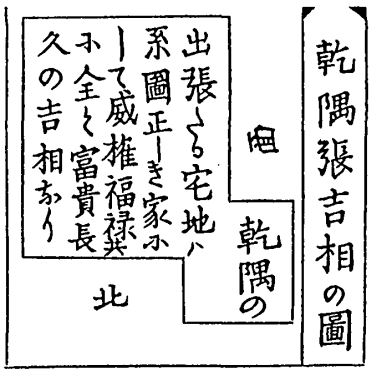

図4　⑥乾隅張吉相の図

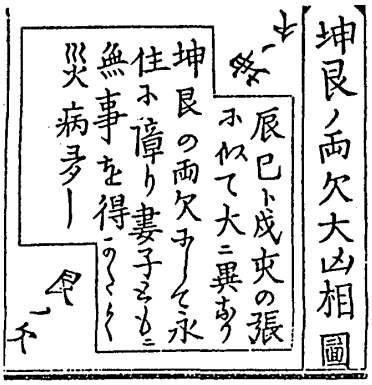

図4　⑦坤艮の両欠大凶相図

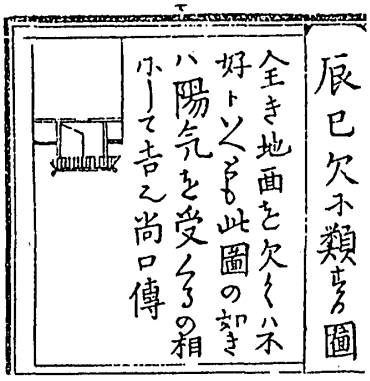

図4　⑧辰巳欠に類する図

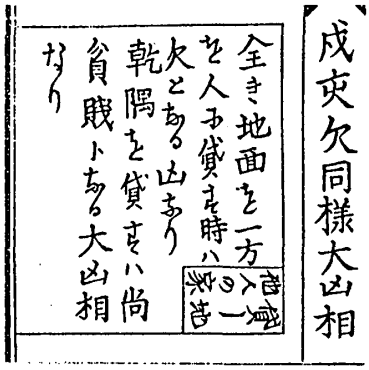

図4　⑨戌亥欠同様大凶相

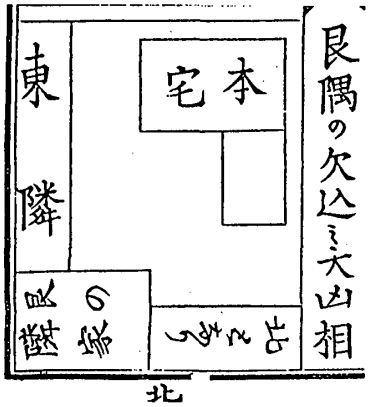

図4　⑩艮隅の欠込み大凶相

隅欠けとなり、大凶なり。家督相続にさわり、散財病災多く、日増しすいびの大凶相なり。④未張り凶相の地も家構えにて吉相となる図　凶相の地面たりとも図の如く本宅を西へよせてたつる時は、地面の張りたる処、宅の南になり、はん栄の相となる。もし又くらの所へ宅を作る時は、尚々大凶相なり。⑤巽隅張り吉相の図　辰巳張りの宅地は、日増し家業栄昌し、殊に遠方より幸福を受ける吉相なり。⑥乾隅張り吉相の図　乾隅の出張たる宅地は系図正しき家にして、威権福禄共に全く、富貴長久の吉相なり。⑦坤艮の両欠け大凶相図　辰巳と戌亥の張りに似て大いに異なり、坤艮の両欠けにして永住に障り、妻子共に無事を得がたく災病多し。⑧辰巳欠けに類する図　全き地面を欠くは好まずといえども、此の図の如きは、陽気を受くるの相にして吉なり。尚口伝。⑨戌亥欠け同様大凶相　全き地面を一方を人に貸す時は、欠けとなる凶なり。乾隅を貸すは尚貧賤となる大凶相なり。⑩艮隅の欠け込み大凶相

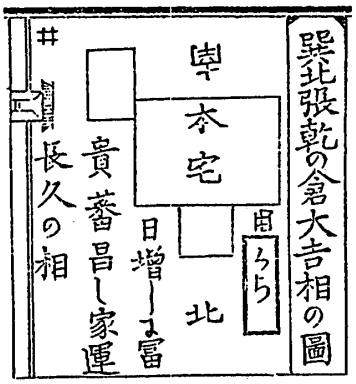

図5　①巽北張乾の倉大吉相の図

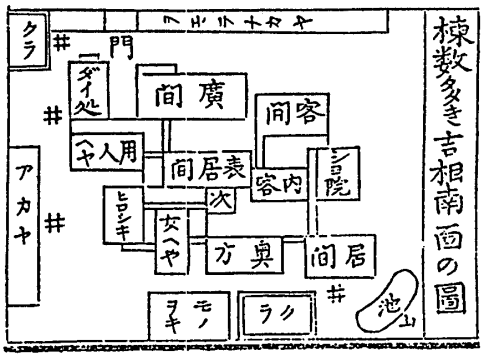

図5　②棟数多き吉相南面の図

（四頁）

（宅経に曰く…、家宅の構格…の二文は前報に翻刻済み*8）

（図五）①巽北張り乾の倉大吉相の図　日増しに富貴蕃昌し家運長久の相

此の図を西面に構える時は、坤張り並びに井戸艮土倉の備えとなり、妻子に障り病災短命、中症手足不自由、又不具の子を生じ、血統に乏しく、家運衰微の大凶なり。但し、東張りのみ吉相なり。又北向きにする時は、乾と南の張り、井戸倉共に吉相となり、官禄を増し、富貴蕃昌の相なり。又東向きにする時は、艮張り並びに井戸、坤土倉となり、西面同様の災病を出来し、その上眼病逆上を患い、絶家同様になる凶相なり。但し西の張り少なく吉なるのみ。

②棟数多き吉相南面の図　此の下の図を西面に構える時は、乾巽の両欠け、坤の出張り、並びに倉井戸、艮隅の山水となり、家運衰え病災夭死家督に障り、血統乏しき凶相なり。又北向きにする時は、乾張り土倉井戸辰巳池となり、富貴長久の吉相なり。但し、山と倉庫のみ凶なり。又東向きにする時は、艮張り土蔵井戸、坤の山水、乾巽の両欠けにして、西向き同形の大凶相となるなり。尚又浴室雪隠竈の向き、畳連数などの吉凶有ると雖も、図になる故、これを略す。

（五頁）

（図六）①乾隅東張り吉相の宅図　権威福禄ともに全芸道に秀で貴上の引き立てを得、願望成就の吉相。②町屋の備え大略　上に設たる西面の図は、家業はん昌の吉相なり。また東表に構えるも吉なり。南西か北向きに構える時は大凶なり。左に図する南面の家は栄昌の吉相なり。北向きにても吉相なり。東か西へ向く時は大凶相となるなり。この如きは何れの向きにても凶。③家の張り欠け見分け様　巳の方へ出張、北の方欠け込みたる備えの家。右に似て大いに異なり、是は亥と丑の方へ出張り、坤隅欠け込みたる家となるなり。家の四方四隅とも欠け込みたるは凶相なり。棟数多き家には、欠けて不足の処有る事あり。又中央の空地あるは大凶なり。

（図七）①地形吉相の図　富貴永久　△開運　△立身　遠方の職引き福をます　右に同じく遠方の福　同上なれども女なんくせず四方の内何れにても張りだしたるは吉相なり　△印二つは名をあらわし、目上の引き立て出世す。②同凶相の図　たんめい病なん災多

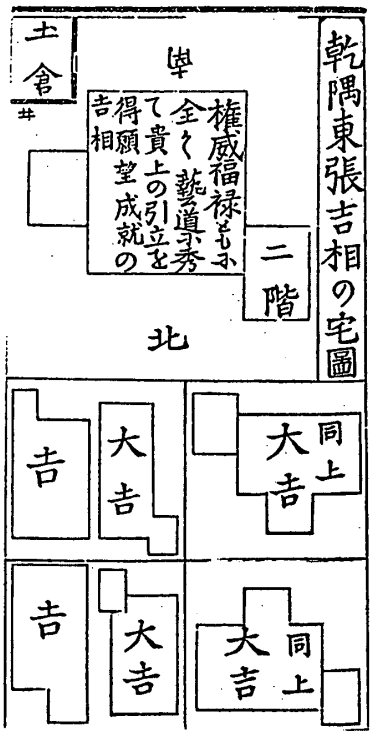

図6　①乾隅東張吉相の宅図

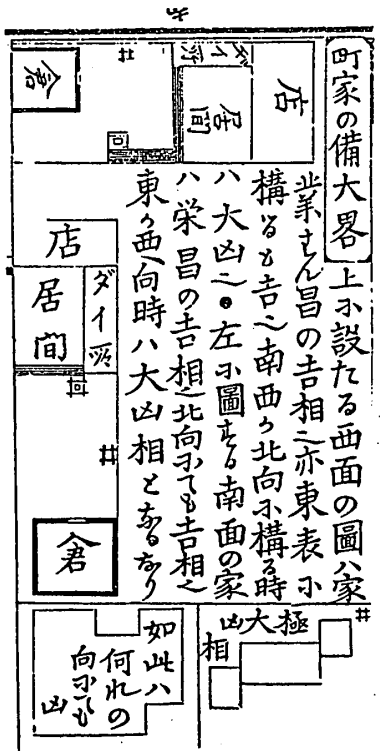

図6　②町家の備大略

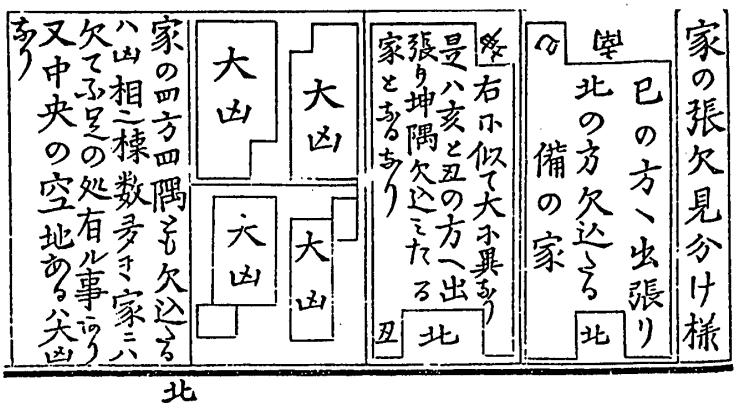

図6　③家の張欠見分け様

し子孫にさわる　右に同じ　同右少しわろし　大すいび　日ましにすいびよく□べし　出行動きを好み又家ぎょうが嫌、不和　妻子にさわり永住ならず　火なんかたわの子ども疱瘡おもし　宅主なきか有るとも女人家事をとる。

家構えも大略同弁なり。辰巳張りの屋敷へ辰巳はりの家、大凶なり。地面と同形なるは凶。道筋又神仏に向かうは凶なり。山の頂上は永住ならず。家運子孫に障る。東南高きは凶。

（六頁）

屋敷形真四角は好まず。三角形神仏の跡か勇猛の人の跡なるべし。中高きは富貴なり。並びに水難有り。中低きは口舌多きか火難あり。東張りは願望成就名を発す。辰巳張りは家業繁昌遠近より福分有り。地面を増すべし。南張りは富貴なり。未申張りは富貴その家系図正しく武器等持ち伝わる事口伝あり。北張りは富貴遠方の職引き強し。丑寅張り大凶。家運おとろえ子孫血脈乏し。又は虚弱の人出来、住

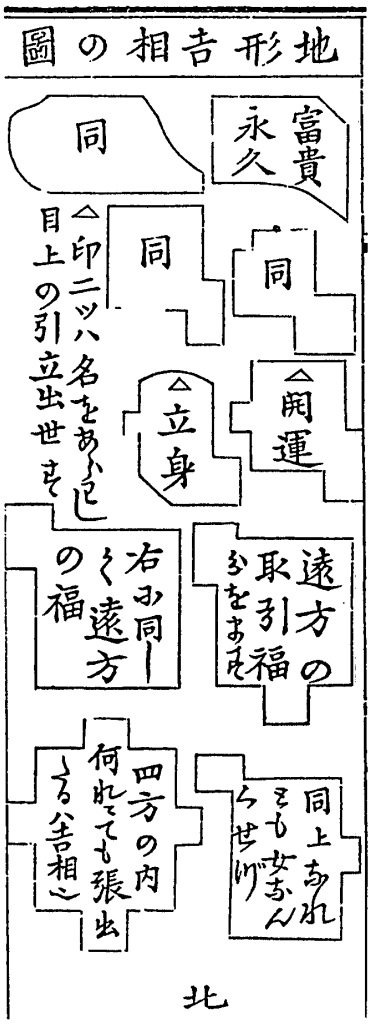

図7　①地形吉相の図

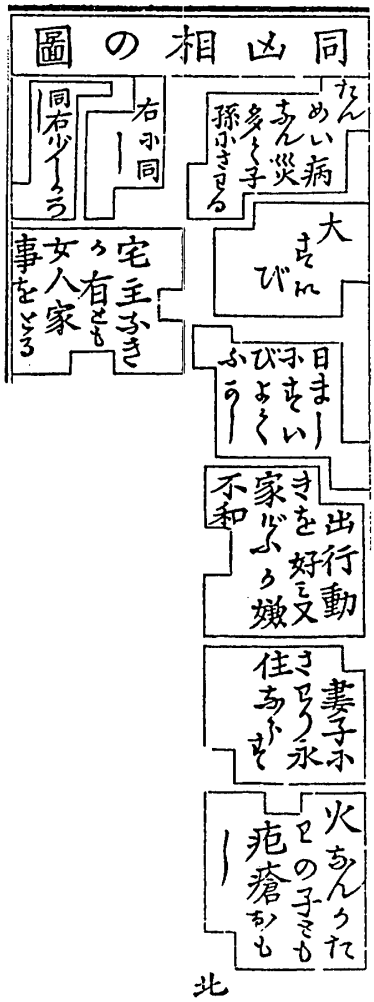

図7　②同凶相の図

主短命、或いは中症などの病難しげし。種々伝弁有る所なり。

門戸は家宅の外にして、所謂五祀三祀の一箇なり。開き方大いに利害あり。一家の禍福凡そここによるといえり。東西南北共に少し出張りてあるは、大吉なり。戌亥辰巳も出張りたる門戸大吉なり。未申少し入り込みて開くは可なり。丑寅大凶俗に盗口と云えり。神仏の備えと云う共此の方に門戸有るは地主の神衰え、借地末社の神却って繁昌なり。東向き長屋門などは惣領の男子に障り、色情口舌又は音曲に心をよせ、医者の出入りしげく、又鶏の宵鳴きする事あり。又白花咲く木有りて其の下に青石埋まり有るべし。穿り出して□べし、口伝。

南向き長屋門は花美を好み、表をかざりかかりまけの身代にして又不忠の下人など出るものなり。西向き長屋門妻縁に障り、女難口舌色々に判断の伝有り。北向き長屋門人気不和合又、井戸を埋めたる事あり。又気鬱などの病、又は領知などに水損等の事多し。

土蔵は戌亥の方、辰巳の方に有るは大吉なり。北南東西も吉なり。未申の方丑寅の方は大凶なり。子孫に障り病難、手足不自由、中症の類、又は短命その備えにより種々判断有る所なり。戌亥の方吉なれども、三間三間半などは大凶なり。物入り多く、家に不忠の下人出来し、色々災有るなり。辰巳の方も、三四五六の間数は大吉なり。八方共に大いに伝弁これ有るなり。

井戸は東の方大吉。その備えにより秀才の男子出生、名を遠近にあらわし、家業繁昌なり。その備えにより欠き落としの折節有る事

（七頁）

あり。医者なれば尚々吉相なり。辰巳井戸は家業繁昌し、殊に遠方の福分を受けるなり。南は大凶なり。逆上癇症眼病うみ血の煩いなど口舌、公辺の心配などその見分け様大いに弁説あり。未申は妻子無事なりがたく病難色々伝弁あり。西は秀才の女子出る事、又女難口舌事。戌亥は大吉富貴長寿目上の引き立て、又忠信の下人出来す。北は名ありて無福なる事、又人気不和合の事あり。丑寅は大凶なり。三病六七起こる、眼病逆上中症又は短命の事、口伝あり。

雪隠は四方四隅共に凶なり。十二支の方を除け、十干の部へ構えてよし。癸などは好まずなり。東にあれば相続人にさわり、願望を妨げ家おとろう。辰巳にあれば物入り多く、殊に遠方の損耗多く、一家中に付き世話事多し。南大凶。眼病口舌逆上の症、種々伝弁あり。未申大凶。妻子にさわる病難多し。別て下部冷寒の症。西大凶。女難口舌多し。戌亥大凶。物入り多く、不忠の下人出来。北凶なり。人は不和合。丑寅大凶。此の方大事の処て片紙に述べがたし。

浴室是又不浄なれば正当を除けて十干の間へ構えてよし。並びに辰巳に在るは芸有りて名をひろむる事あり、口伝。南凶なり。眼病又心労たえず、色々判断あれ共、ここに略す。未申隅は大凶。未か申へよれば吉。西は吉凶両断。戌亥大凶。隅を除けて構うべし。北吉凶両断。丑寅凶なり。東好まず、不祥の兆しあり。

流走は東、辰巳、西、戌亥共に吉なり。北も可なり。其の外は凶なり、口伝。

手水鉢、戌亥有るは大吉。辰巳東も吉なり。西北無事、其の外凶。

神棚は間数多き内は清浄なる間へ祭るべし。往来の見付、又は寝所の間など除けて設くべし。戌亥の方大吉。子の方、寅の方、卯の方吉なり。前後備えにより、辰巳の方、西の方亦吉なり。

仏壇、是又尊敬を専一とし設くべし。大略神棚に同理なれ共、丑寅に在るは大吉なり、口伝あり。戌亥の方吉なり。西も又吉なり。其の外好まず。なれ共備えにより設格有るべし。備えにより仏体に疵の有る事などを見分け様、霊仏などの事、口伝。

（八頁）

竈は五行集会して五味を熟し、飲食を調え人命を保護するの霊所なり。人居の根元大いに吉凶の弁あり。向き方東向き、辰巳向き、大吉。望み事成就、家のためになる人出入り多し。南向き、次て吉なり。西向き、北向き、口舌事多し。又女にさわる。未申向き凶、口伝。戌亥向き、物入り、役介多し。丑寅向き、大凶。嫁姑不和、口舌多し。数は、四つ、五つ、八つ吉なり。三つ可なり。一つ、二つ、六つ、九つ大凶。中央より東南に在る吉なり。

窓は東に開くこと大吉なり。巽隅吉なり。南も可なり。其の外凶なり。

池泉水は東に在るは喜慶の理あれども、少し色情の難を兼ねるなり。辰巳は大吉、家業繁昌し、家内和順なり。南は凶なり。種々災病六七起こる、弁説ここに略す。朱雀の巻に委し。未申は大凶、病難多く母に不孝の女子出る事有り。西は吉凶両断なり。戌亥は大吉、富貴満足、目上の引き立てあり、外口伝。北は吉凶両断なり。玄武の巻に委し。丑寅大凶なり。家相玄機にくわし。

築山は戌亥に有るは大吉なり。北の方、西の方吉なり。其の外好まず。並びに南側などの家は南の方に築山有りても却って吉なることあり。丑寅、辰巳の方凶なれども、家の順逆によりて弁訳あり。

畳間取りは家主（あるじ）の居間を基とし、その間つづきの相承相剋を以て吉凶を定むべし。相生なるを吉とし、相剋を凶とするなり。一畳金、二畳金、三畳火、四畳木、五畳木、六畳水、七畳土、八畳土、九畳金、十畳金、右の例にて十払えにしてその数を見て、五行に配当し、吉凶を定むべし。半畳は別に弁訳あり。角半畳、長半畳、三角畳、各々別なり。一畳半、二畳半吉なり。三畳半、四畳半、五畳半各々凶なり。六畳半、七畳半、八畳半、九畳半、十畳半各々吉なり。四畳半は、別家、茶室は格別、平生用しげき間に用いれば大いに凶なり。惣領にさわり、次男又は養子相続となり、又望み事不成就にして無益の物入り多し。四畳と六畳の間続きは、望み事成就し、又酒宴など好み、人出入り多し。五畳と六畳は遠方より福分至るなり。

（九頁）

五畳と九畳は右に反して遠方に付き、損失、難船の事、又妻縁一度にてむつかしきなり。五畳と二畳か十畳は、先年井戸を埋めたる事有る住所にて、居間は色情の口舌絶えず、物入り多し。六畳と八畳は、病難、別て積溜（しゃく）飲など、女は経水（ちのみづ）不順なるべし。又家業に不為の事多し。七畳と六畳は、主人のある人は、永の暇を出され、又半

身居立不自由、腰下の病、又はうみ血出る病など出るなり。此の住所には、石仏石碑、塚などあるべし。又死骨埋まり有る事もあり。一畳と八畳、又八畳と九畳などは、大吉なり。畳間取り吉凶、中央の巻に委し。畳間取り凶相は、床かまちなどそのままにして、直し方これ有る事なり。

井戸穿改めの伝は、その時の吉方をえらび穿つべし。古井を埋めるには是又方位、時日をえらび、夜未明前に手炬をたき、井水に火影をうつし、その水を汲み上げ清き器へ入れ、清浄なる間の棚に置き、神酒洗米を備え香をたき、再拝して祭るなり。さてそれより長き丸竹の節をぬき、井の中へさし下し、竹の本を水へとどかしめ、上を地上にあまし、吉方の土にて埋むべし。此の如くする時は、地中に陰気などもる事なし。且つ又先に汲み置きたる水を新井にうつし入るるは、前のごとく未明前に祭りて手炬にて井水に火光をうつし入るるべし。更に金銀箔など井中へ入るる、口伝。

雪隠を改むる時は、ふる雪隠の溜跡は不浄の土を悉く取り払え、その時の吉方より清土を取り来たり埋めるべし。その上へ白紙にて男女と雛人形ふたつこしらえ立て置くべし。此の如くすれば、陰気地中に残る事なし。

（表一）右は入用のあらましを示すのみ。尚委しき事は家相活眼を見るべし。

金神殺を制伏は、寅午戌火の日年月、及び丙丁奇火星を用ゆべし。又太陽天月徳天赦九紫の到方は忌まず。大将軍殺を制伏の法、蚕室巡りある月中は造作動土凡て忌み恐るる事なし、口伝。

（十頁）

（図八）本命的殺は中央より始まり八方へふさがるなり。中央艮坤へ巡る年と三十四才より六十迄はその祟り尚々強し。命殺の祟り有る中央たり共中央の分領の外の普請は苦しからず。然れ共転宅嫁入りなどは中央を犯すゆえ凶。女十六の嫁入りは夫家に祟り、十九は

表1　歳徳明方

歳徳明方	甲己歳	乙庚歳	丙辛歳	壬丁歳	戊癸歳
	甲ノ方	庚ノ方	丙ノ方	壬ノ方	丙ノ方
▲▲▲金神	午未申酉	辰巳ノ方	子丑寅卯午未	寅卯戌亥	子丑申酉

図8　本命的殺

身に障る。三十四も凶、男の二十五万に忌むべし。

（図九）①東向きの門戸口を開けたるは、惣領の男子相続に障り、虚弱病身などにて常に医者の出入り薬用しげく、又色情のために運命を害う事、又音曲に心をよせ遊楽を好み、時々鶏の宵鳴き牝鶏の報時を有るべし。此の家には白き花咲く木有りて、其の下に青石埋

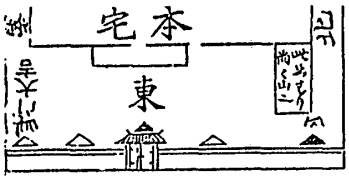

図9　①東向門戸口の図

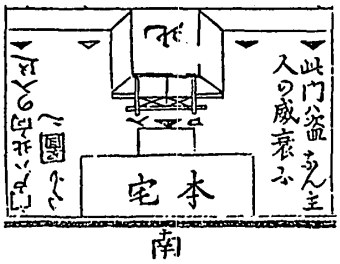

図9　④北向門戸口の図

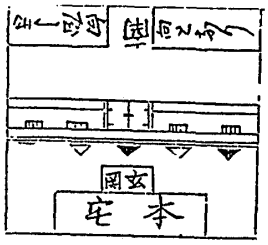

図9　②南向門戸口の図

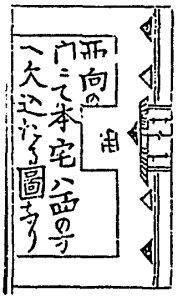
図9　③西向門戸口の図

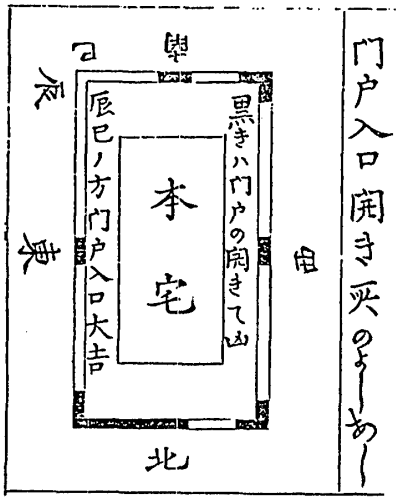

図9　⑤門戸入口開き所のよしあし

まりあるべし。穿りだしてよし。宅内に四畳と二畳の続き有るは、色情の難多く、又未申か丑寅へ張り出たる備えある時は、実子相続に障り、病難たえざるべし。未申か丑寅に井厠有るも同断なり。②△門戸開きてよきばしょ　▲此の印門戸大凶　向こうとなり　向かい屋敷　南向きの門戸入口の家は、表向き良く掛かりまけの身上にして表をかざり、又不忠の下人出来し、或いは君臣の間に心配多く、無益の物入り、又は盗みにあう事あるべし。又願望有りても叶わずして費えのみ多く公忠に心配の事有り。本亥に三間の建物有るは尚凶なり。③西向きの門にて本宅は西の方へ欠け込みたる図なり　西向きの門戸入口は惣領には男子生まれ難く、たとえ生まるるとも短命、病身、不行跡にて、二三男終には養子となるべし。それのみならず縁組みも初縁にて納まりかたし。女の事など付き口舌せわごと有るべし。又未申張り出たるか、或いは井戸池又は雪隠など有る時は妻子に災たえざるべし。④同方に引き込みて門戸入口を構えるは女人男にかわりて家事を執り、又霊仏と埋まり井有るべし。

（十一頁）④門戸は北向きの入り込みたる図なり　此の門は盗なん主人の威衰う　北向きにして入口などを構うるは、北の陰気を受け家運の衰微を催し、家のためにならざる者共来たりて散財をなさしめ、又脾胃弱く病難別て湿気の症、手足筋骨の疼み、女人気うつの病を煩うべし。又北より行き当たる街を受ける時は、人にあらわしかたき病を生ず。又井戸に人陥り死して埋めたる事有るべし。又引き込みたる門戸等は酒を好む人と女人気強きの女主の家となるべ

し。（凡て北門は人気不和合、又は領知に水抜、風難、破船多し）

⑤門戸入口開き所のよしあし　黒きは門戸の開きて凶　辰巳の方門戸入口大吉

（図十）雪隠の付け様　此の図の通り四方四隅を除きその間に付けてよし。然れども癸の方忌むべし。目上のことと福分に障る　病難多し　一族の事福分に障る　病なん尤も妻子に障る。

門戸は吉相の所にても街の行き当たりは凶。東の道を受けるは相続人に障り、養子となり夭死。南の道に向かうは、物入り多く君臣の間に心労多し。西より行き当たるは☲☲の象にして水難洪水風難破船の損、又は病災多し。流川城門神社堂塔に対合う家居は凶なり。両雄並び立たざるが如し。

雪隠は吉相の所にても北窓ありて北辰の影向有れば、病災多し。星光入らぬよう改めてよし。又家と同じ棟は凶。別屋根にして吉。神仏だん竈井戸門戸土倉の入口などに向かうは病災口舌物入りたえず。又夜中は三度咳をして厠も入るべし。

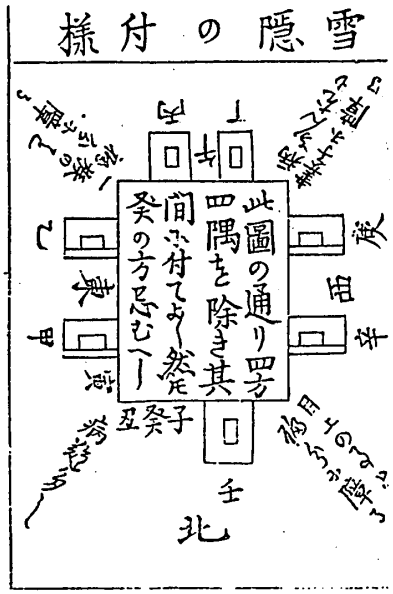

図10　雪隠の付様

門柱を接ぐは子孫に障る。斜むも凶なり。節多きは腫瘍煩有り。門木に栗木を用いれば盗なんを防ぐ。家に不吉有りし後、門に香酒を供え酒雑巾にて門戸を清むべし。又門戸の開き、たてよことも吉寸を撰ぶべし。門前三角石あるは火災、同二つの池は央字頭と号けて愁悲たえず。同平丸の石は高名。

家の大極柱と称するを接ぐは、子孫に障りに凶相なり。床柱も又同断なり。

家作に陰木を用いるは、発達を妨げ家運おとろえ病災たえず、柳、槻、楠、栴檀などを用いれば必ず子孫に障る。然れ共寺社は格別なり。

（十二頁）

庭前樹木と陰木は凶なり。樅、槐、楠、石榴、柳、棕櫚、芭蕉、蘇鉄などは凶なり。坤隅の大木は凡て大凶。家運廃絶す。松竹など茂生するは長久の栄相なり。柿も吉なり。軒近くの梅は凶なり。家へ枝のさすは病災たえず。然れども巽隅に有るは吉なり。梅、棗は坤隅、巽隅に有るは吉なり。坤隅に梨あるは大凶、病難。艮隅の桃は一切の邪気を払う。又石榴も寝間前に有るは子孫栄生す。

庭石に字有る石の石臼などを用いるは大凶。又疣石など醜き石有るは醜き子ども生ずる。方石は貴子を生ず。三角石は火災、坤の立石大凶なり。

（図十一）竈は前に南向きも吉なりと述べたれ共、家の中央に南向

きは火災を主どる。又棟梁の真下に有るも大凶なり。炉火燵も同断なり。中央より東南吉なれ共その供えにより座の下に構うる事吉なり。竈は東向き、辰巳向き大吉なり。竈君は一家の主、養生の活命の霊所、人間の善悪を晦日毎に天に表奏する神なれば、常に善事を行い、不敬なく尊崇すべし。前にて雑言小唱、又不浄物を干す事なかれ。上に刃物を置くべからず。晦日に松と雷鳥の扁額を供うれば、火災を除く。雷鳥は寒山の松に住み、火を防ぐ鳥にて、竈神の愛鳥なり。又五月戊辰の日、米粉にて猪の首を作り、竈神を祭れば栄う。

竈井厠の三つと艮坤中央の三所は、家相第一の要所にして、吉凶共に重し。竈井厠の中、艮坤中央の中に有るは、最大凶なり。漏斗窓、池山倉など大凶なり。此の三所は一、二、九、十、十一など金の畳数有る事、大吉なり。中央には庭場、井泉、竈炉、板間、鴨居皆凶なり。

都会の地にて通行路次の上、又は庭の上などへ二階を張り出すこと、三三の象にして物入り多く、家業不吉多き凶相なり。下広く上の狭きは、物の順なり。同じく屋上棟越に火の見、涼み台、物干し場有るは家業衰え掛かりまけ、不時の損財多し。又神仏、炉、井戸、竈、厠等の上に有るは、尚々大凶、災強し。

一棟の家を片方新たにするは運を破るなり。

穴倉は大凶なり。中央と坤艮は尚大凶。家運頽敗す。無拠は辰巳、又は甲乙の部へは可なり。

厩牛屋は艮坤南は尚大凶。不浄を兼ねるゆえ、正当隅を除け、七干の部へ備えてよし。家に背くは凶なり。

碓臼場是又七干の処、吉なり。先祖の祭祀を怠り墓を粗末にするは運開かず。祖先は根本、子孫は枝葉なり。石碑など分を犯し大壮美麗は子孫頽敗す。

（十三頁）

家相改正して、先ず家の先祖を霊神に祭り、次に墓所を念入べし。粗末にすれば運開かざるのみならず、災事起こる。又後人の石碑を先代より大壮にすると、石碑に疵あると、自然石の碑と、法名に了の字有るとは、皆子孫に障る。修ふくは年忌の時にすべし。又妙西というも好まず。迷の字に変えるなり。又親の墓高く、其の下に家居するは、子孫に障ると、吾妻鏡脱漏に頼朝公の事をいえり。

墓相の事は殷人の墓誌に右林、左泉、後岡、前道、と云う。史記に樗里子が兼ねて好墓の地を示せし事見え、又秦の朱仙桃が捜山記、漢の青鳥先生が実経、晋の郭璞が図経、陶侃が捉脈の賦、又雪心賦

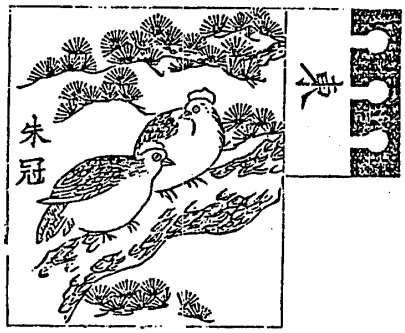

図11　竈向と朱冠鳥扁額図

に神前仏後を忌むるを云う。

又程正叔の葬説に、祖墓安るれば、子孫安く、祖墓危うければ子孫危うき由をいえり。墓は祖先の精霊の居宅なれば、大切に祭るは孝の道なり。又魏書に、管輅母丘険が墓を見て、二年なして法族亡ぶるを的察、又呉公が朱子の祖の墓地の水を味て、当に賢人を出し、孔子に等しからんといえる事、山法全書に見えたり。

詩経の十五国風各々異なる如く、其の土地の風水順逆によりて、人情、風俗、言語、産物も又別なり。山気の勝つ処は男多く生まれ、沢気の地は女多し。水気盛んの地、暗者多く風気多き地、聾多し。木気の処、傴たる者多く、石気の勝つ所、力強し。険岨の地瘤多し。暑気強き地、残い易し。雲気の処、寿長し。谷気の処痺れの病多し。丘陵の地、□多し。□気の処貧人多く、流れにより処富易し。衍気の処仁者多し。陽気の地、心廣く陰気の地、偏くつなり。山を東南にする地、眼病多し。北岡の処、財用足る。南陽を受ける地、神

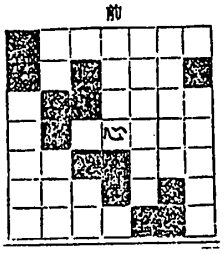

図12　敷地を分割して地面を均す図

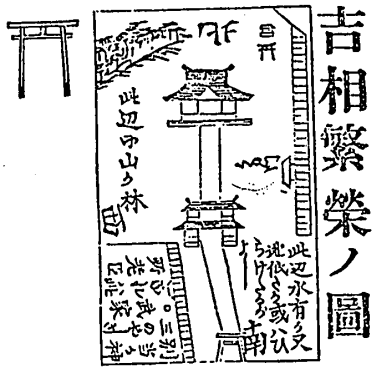

図13　吉相繁栄の図

徳盛んなり。北陰を受ける地、仏法に帰依す。東陽の地、文道行われ、漢土に似たり。魯は尚東開けの地なり。西陰の地、武術を好む。

（この後、各地の吉凶の部分省略）

（十四頁）

（図十二）此の図は新たに家を建てる時、地面の長短にかかわらず、四十九局にわり■の処の土を三鍬づつ取り捨て、其の跡へ吉方の清土を納めて地形に及ぶべし。但し金性の人を國二（ママ）

（図十三）吉相繁栄の図　此の辺水有る、又池低たり、或いはひらけたるがよし　別当が神三のやしき、武家なれば此の処老臣　此の辺に山か林　□□門

寺社俗家城郭又は村里たり共、南東ひらけ、西北に山或いは林等にて囲みたる地は、繁栄なり。東に流水有るは尚く永久の繁栄にしてその名高く、門より家の戸口へ真直なるは寺社俗家共に凶なり。様子のみよくかかりまけ物多し。敷石も斜めにしてよし。又敷き詰めるは凶なり。

宅地内鎮守の宮は艮隅へ南向き、少し西へ向け、又乾隅へ辰巳向きは大吉、然れ共弁天を乾隅へ祭る時は其のかいなく、相場山事無益の損有り。坤隅ならば東か丑寅がよし。若し南か西へ向く時は、妻私に里へ財を贈り、又宅主なき如き事有り。巽隅ならば戌亥へ向かえし、若し東か南へ向く時は、親族の事、又遠方に付き、損失、風難、破船、度々なり。

艮隅たり共東か北へ向く時は、災害多く永住なりかたし。何れの

方にても本宅へ向け家を守る様に祭るべし。然れど北向きは大凶なり。宅内神仏の備えかた右同断なり。

（この後畳間取りの部分省略）

二、『家相方位指南』にみる家相説の特徴

（一）方位別吉凶判断

本書の上巻には著者の家相説が体系的に記述されている。家相判断の項目毎に方位別の吉凶判断の内容をまとめたものが表二である。家相説では「辰巳張りの宅地は、日増し家業栄昌し、殊に遠方より幸福を受ける吉相なり」のように、敷地や屋敷の各所毎に、どの方位に何があるか、或いはその場所の形状の凹凸の如何により吉凶が判断されるが、その判断の内容を吉凶別に示したものが表三、四である。

表二からは、方位別吉凶判断の際に問題とされる住まいの各所や判断に用いる方位が明らかになる。住まいの敷地の形状、敷地と道路の関係（門戸の位置）、門戸の形状、家屋（母屋）や別棟（倉、土蔵、馬・牛小屋、唐臼場と呼ばれる粉ひき場、鎮守社など）の配置と形状、井戸、生活用水の引き込みと排水、池泉水や築山、庭木などの庭の造作、雪隠や浴室、竈、神棚、仏壇など屋内の要所や窓の開き方について、各々方位別の吉凶判断をしている。

住まいを構成する多くの要素があらわれるが、特に人々の生活に密着した火、水を扱う場所と不浄の場所、敷地、家屋の形状（出張りと欠け込み）に注意を払っている。火、水を扱う場所と不浄の場所とは、台所や洗面所（洗濯場）、浴室、便所などの所謂「水回り」であり、衛生や使い勝手の視点からも、近世以降の住まい造りにおいても同様に重要視される。敷地や家屋の形状に関する視点は、住まいの日照、通風に直接に影響を及ぼし、特に湿気対策に深く関わるため、高温多湿の日本の住まい造りには欠かせないことも、同じく現代に通じる。

これら住まい造りに欠かせない点について、家相説では方位別の吉凶判断という手法で注意を喚起している。方位別に見ると、艮と坤、即ち北東と南西の所謂「鬼門軸」が重視されると共に、それに直交する巽と乾、即ち南東と北西の軸も意識されることが明らかである。坤艮の両方位は主に凶相の判断に、巽乾は吉相の判断に多くあらわれる。直交する二軸による吉凶の対立概念の振り分けは構成上分かりやすく、家相説では東西南北の四方による判断よりも、この坤艮巽乾の四隅による判断の方が多く見られる。

さらに上記の八方位の他にも、十干十二支を方位に当てはめた方位別の判断もみられる。より慎重な方位撰びが必要と判断された雪隠、浴室、穴蔵、厩牛小屋、唐臼場の判断では十干の方位も問題にされている。これらは、いずれも衛生上特に注意する必要のある箇所であり、計画、設営に当たり、より慎重な対応をするべきだとの判断が働くために、八方位や十二方位を僅かに外した十干の方位を指定するものと考えられる。

表2 『家相方位指南』上巻方位別吉凶

○…吉，×…凶，△…吉凶両断

八方位		東		巽		南		坤		西		乾		北		艮
十二支	寅	卯	辰		巳	午	未		申	酉	戌		亥	子	丑	
十干*	甲		乙		丙		丁		庚		辛		壬		癸	
宅地張り		○		○		○	×	×		○		○		○		×
宅地欠け				×				×				×				×
屋敷形状張り		○		○		○		○						○		×
張り出した門		○		○		○		×		○		○		○		×
入り込んだ門				○				○		×				×		×
長屋門向き		×		○		×		×		×				×		
家宅高楼								×				○				×
店表		○				○		×		○				○		×
倉・土蔵		○		○		○		×		○		○		○		×
井戸		○		○		×		×		×		○		×		×
雪隠	◎	×	◎	×	◎	×	◎	×	◎	×	◎	×	◎	×	×	×
浴室	◎	×	◎	○	◎	×	◎	×	◎	△	◎	×	◎	△	◎	×
流走		○		○		×		×		○		○		○		×
手水鉢		○		○		×		×		○		○		○		×
神棚	○	○		○						○		○		○		
仏壇		×		×		×		×		○		○		×		○
竈向き		○		○		○		×		×		×		×		×
窓		○		○		○		×		×		×		×		×
池泉水		△		○		×		×		△		○		△		×
築山		×		×		×		×		○		○		○		×
穴倉	◎		◎	○				×								×
厩牛小屋	◎	×	◎		◎	×	◎	×	◎	×	◎		◎	×		×
唐臼場	◎		◎		◎		◎		◎		◎		◎			
敷地内鎮守				○				○				○				○

＊十干の方位は東西南北の正当を少しずつ外したところに位置する．例えば甲は東と寅の間に，乙は東と辰の間にある．十干のうち戊と己は中央に位置するのでこの表には記していない．十干の吉凶は表中網掛けで示した．

表3 『家相方位指南』上巻の吉相表現

吉の表現	表現例	(例)
富貴繁栄	家業繁栄・家業繁昌・繁栄・栄昌・繁昌	16
	富貴長久・富貴永久・富貴繁昌・富貴	13
	遠近より福分・遠方より職を得る	9
	福を増す・商い三倍す・財用足りる・金銀取引多い	4
	地面を増す	1
家運長久	家の威光強い・威権福禄・権威福禄	4
	秀才の男子出生・貴子を生ず・英雄となる	4
	子孫栄生・男多く生まれる	3
	系図正しい・家系図正しい	2
	家運長久	1
	宅主堅固に家を守る	1
立身出世	名を遠近にあらわす・名を発す・名を広む	8
	目上の引き立てを受ける	6
	立身出世・立身・官禄を増す	5
	芸道に発達・芸道に秀でる	4
家内和順	宅主慎み深い・心廣い・仁者多し・尊敬を受ける	4
	家のためになる人出入りする・人出入り多い	4
	忠信の下人出来・忠誠厚い	3
	女について幸あり・秀才の女子出る	3
	よく夫に仕える	1
	家内和順	1
	酒宴を好む	1
その他	願望成就・開運	6
	神徳盛ん・仏法に帰依する	3
	長寿	2
	文道行われる	1
	武術を好む	1
	武器持ち伝わる	1

表４『家相方位指南』上巻の凶相表現

凶の表現	表現例	(例)
家運衰退	家督相続に障る・血統に乏しい・絶家同様・血脈乏しい・子孫頽廃 次男又は養子相続・実子相続に障る・子孫に障る・惣領の男子に障る 腹かわりの兄弟・駆け落ち	32
	家運衰微・日増しに衰微・大衰微・家業衰微・家運頽廃	21
	宅主なし	2
	地主の神衰える	1
散財損益	散財・華美を好む・かかりまけの身代・物入り多い・表を飾る 貧賤・不時の物入り多し・相場山事無益の損	28
	遠方の損耗・遠方で難船・旅先で災難	8
	盗みに合う・盗難	3
病難短命	病災・病難・医者の出入りしげし・薬用しげし・持病	33
	中症・手足不自由・不具の子・眼病・逆上・疱瘡・虚弱・気鬱の病 癇症・うみ血の煩い・下部冷寒の症・溜飲・経水不順・腰下の病 脾臓弱い・湿気の症・手足筋骨の疼み・人にあらわし難き病・腫瘍 聾・痺れ・口中の病・怪我・やけど・産に障る	60
	短命・夭死	9
種々災害	種々災いあり・無福・願望妨げる・心労・厄介多し・望み事不成就 愁い事絶えず・権を争う・恩を報せず・施し心薄い・恨まれる 高いところから落ちる・雑用多し	27
	不行跡・地位が落ちる	2
	火難・火災	9
	水難・領地に水損・破船多し・洪水	8
	風難	4
永住困難	永住に障り・永住ならず	6
	出行多し、同居せず	5
家内不和	不忠の下人出る・君臣の間に心配事多い	11
	妻子共に無事を得難い・妻子に障る・妻縁に障り・母に不孝の女子 妻縁一度ならず・初縁で納まり難し・醜き子生ずる・嫁姑不和 妻里に財を贈る	20
	不和・人気不和合・一家に世話事多し・暗い者多し・偏屈・親族に難 父子不和合・兄弟不仲・親子不仲	15
	女人家事を執る・女人気強い・女主の家・女多し・女人の権強し	9
	口舌	16
	色情の難・女難	13
その他	音曲に心を寄せる・遊楽を好む	3
	公辺の心配・公忠に心配事あり	3
	酒を好む	2
	鳥が宵鳴きをする	2
	剣難	1
	永の暇を出される	1
	死骨埋まり有る	1
	無芸	1

（二）吉相、凶相判断の表現

表三は吉相の表現である。家相判断による住まい造りの際に、当時の人々が何を希求したのかが如実にあらわれている。より豊かになり、家業が繁栄することを望むと共に、男子（長男）による実子相続という「系図正しい」相続が行われ、「家運長久」することが志向される。又、目上の引き立てにより立身出世する、という判断も多く目につく。一方、宅主の心が広く、家臣もよく仕え、家内和順であることも望まれる。住まい造りの際に家相を整えることにより、家内安全、立身出世、お家安泰が望まれることがこの表からは明らかになる。

表四は凶相の表現である。表三と比べて、判断の範囲が広く例数も格段に多く、家相を整えることによりこのような危険を回避しようとしていることを示し、吉相以上に興味深い。何よりも病難、病気に関する表現が、種類、例数ともに突出している。重い病気から軽い怪我に至るまで、子どもから高齢者に至るまで、女性固有の病や精神衛生に関わる領域まで、幅広く取りあげられており、これらの問題解決まで家相が負うことや、住まい造りや改築、建て増しによってこれらの問題解決につながると期待されたことが明らかである。もっとも、人々にとって分かりやすい病名を挙げて、これらの問題解決のために家相考鑑を奨める家相相者の姿勢が窺えることも確かである。

他にも家督相続、家運に関わる問題、散財など経済上の不安、様々な災害への不安、家内不和、女難や口舌（口は災いの元の諺通り、口、言葉による災い）なども住まいにおける安穏な生活を脅かす要素として挙げられる点が明らかであり、興味深い。これら諸問題の解決には、願掛けや手相、人相を観る類の他の占いもあろうが、家相による対処法も考えられたことが、取りも直さず「住まい」は人が雨露を凌ぐための囲いだけではなく、人の生活の場であることを示しており、住まいに寄せる思いが強いことが分かる。

（三）畳数による吉凶判断

敷き詰められた畳の間が続く我が国の住まいの特徴を活かして、江戸時代の家相説では「畳間取り」の吉凶が問われることが多い[*9]。表五は隣り合う部屋の畳数による吉凶判断の表現をまとめたものである。十畳以上の部屋の場合は、その数から十を引いた畳数での判断となる。又、四畳半などの半畳を用いた部屋の吉凶判断も別に示される。

現在では四畳半、六畳、八畳、十畳など、矩形の部屋に対応した畳間（和室）が一般的であるが、五畳、七畳などが畳数による吉凶判断に供されるということは、これらの畳数の間も実際に作られたことを意味する。同時代の家相書には、続き間を吉相に整えるために、一部を床板敷きにした和室や、床の間、違い棚などを組み入れることにより畳数を調整した和室の図なども示されている[*10]。又、本書にも畳数の整え方の助言として、「畳間取り凶相は、床かまちなどそのままにして、直し方これ有る事なり。」と解決方法がある

表5 『家相方位指南』続き間畳数の吉凶

○…吉，×…凶

畳数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
五行配当	金	金	火	木	木	水	土	土	金	金
1	×									
2	○	○								
3	×	×								
4	×	×	○	×						
5	×	×	○	○						
6	○	×	×	○	○	×				
7	○	○	×	×	×	×	×			
8	○	○	○	×	×	×	×	×		
9		○	×	×	×	○	○	○		
10		○	×	×	×	×	○	○	○	○

ことを断っている。

吉凶判断は、畳数に陰陽五行説の五行の数別の吉凶を配当し、五行の相生・相剋による判断を下しているが、表を見ると必ずしも相生・相剋による判断にもよらない場合もある[*11]。家相相者毎の判断が加えられ、独自のものとならない限り、多くの家相書で問題とされることもないため、畳数による吉凶判断には様々なものが見られるが、「あてにならないので信じるには価しない」と評価する家相書もある[*12]。

結語

本稿では『家相方位指南』上巻を翻刻すると共に、方位別吉凶、吉凶判断の表現、続き間畳数の吉凶について家相説の内容を分析し、家相を通して当時の人々が住まいに求めたもの、忌避したいと願ったもの、住まい造りの際にこだわりを示した箇所について考察した。安全で快適な住まいでの生活を願う思いは近世と現代とで変わるものではないが、特に住まいにおける人と人との関わり、家族を中心とする一家、家臣も含めた一族の家運長久をも住まい造りに託した点を考えると、現代の住まいが失ったものも明らかになる。

江戸時代中・後期の家相書は、流派や著者による特色も顕著にあらわれるが、本書の場合は著者が易学者でもあるため、八卦の爻が持つ意味を家相判断に活かす点に特徴があるが、上巻では畳数の吉凶判断の部分などにそれが示されている。爻の判断については筆者

の扱う範囲を超えるため、家相判断の内容に関わる部分のみの考察とした。

*1 本学紀要第四十集拙稿「『家相方位指南』にみる江戸の家相説」。

*2 前出拙稿の三十三頁表一「『家相方位指南』の構成」に本書の各項目と図表の内容をまとめた。

*3 上巻のうち、昨年度本紀要第四十集で翻刻した部分と、本文中易の八卦の爻の記号が多く含まれる部分（本書十三頁～十七頁のうちの一部）を除いた全文を翻刻する。なお、一部割愛した部分については、その内容を二にまとめ考察する。著者の宍戸頼母は易学者であると共に家相相者でもあったため、中巻、下巻は易の八卦と暦による吉凶判断の実践が示されており、上巻の一部で翻刻を割愛した部分にも八卦の爻の組合せによる判断が記されていたが、本稿では家相判断に関わる部分を優先して扱った。

*4 宍戸頼母の著書には『家相改正図誌』、『相宅知天鏡』、『方位明鑑』があるが、いずれも刊年は不明である。

*5 本文中の図表は全て東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の版本から転載したものである。

*6 底本の虫食いや不鮮明な印刷のため判読不明な文字などは□で示した。

*7 自序の部分の翻刻は、本学紀要第四十集三十二～三十四頁に掲載している。

*8 「宅経に曰く…」、「家宅の構格は…」の部分の翻刻は前出紀要三十五頁に掲載している。

*9 畳間取りは多くの家相書が扱っている。松浦東鶏『家相図説大全』（享和元年刊）に詳しい。

*10 前出『家相図説大全』には、十畳の座敷に半畳の床の間と一畳の床脇を造り、畳の部分を八畳半とした和室の図などが見られる。

*11 例えば二畳と六畳の組み合わせでは、五行では二畳が金、六畳が水であり、この組み合わせは「金生水」で相生であるにもかかわらず、著者は凶相であるとしている。

*12 畳数による吉凶判断について疑問を呈しているのは、長田蘖雀『家相図解全書』（享和三年序）である。「けだし畳数を相生相剋によるなどというは、格別相違の沙汰なり。」とし、相生相剋による続き間の畳数による吉凶判断を否定している。